逐巻浪華乳夜嵐

乾

柳田文庫
文庫11
A 272
1

A 272

雄飛萬里雲

末松謙澄閲

中島萬著

東天に輝く日の丸は
大君の御旗
西南に閃く星影は
荒男の魂魄

東京

金港堂梓

43-7840

南溟先生慷慨士嘗欲路
坊快一飛同志況有方外人
里風倒樽前洋水何圖
魚腹獨完先生博古中興
元勳名義繫輿

南溟先生慷慨士嘗欲路
海快一覩風土況有方外人
黒風倒捲南洋水何圖
魚腹獨完元生博古興
元勳名義繫輿

望潔渭土手決輸贏睡
馳之恨翻作賊砲煙聲
天悚色曲直老壯果然
矣驊騮首就戮妖氛熄余
白雪鬼酹一杯豈知恥
甚於死哉九泉避逅伯月

駝笑問先生著何来
古南海先生歌係余舊作書
為
中島君代其孝
明治廿子春
著院本題詞
紫海老人依田百川

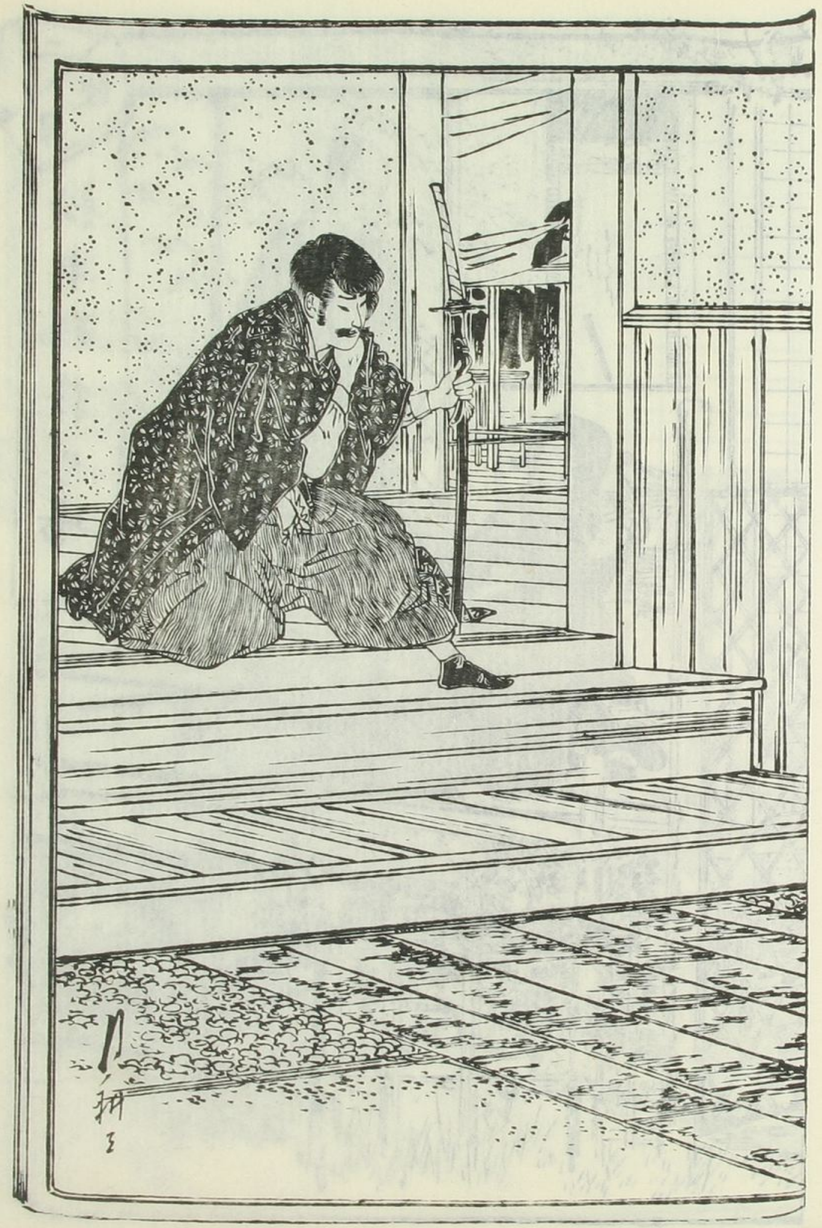
海城秋露滴戎衣往
事分明夢亦知讀到
一編逆浪曲風霜滿
目使人悲

讀逆卷浪夢之夜嵐有感
青萍逸人偶作
波光女史書

自題

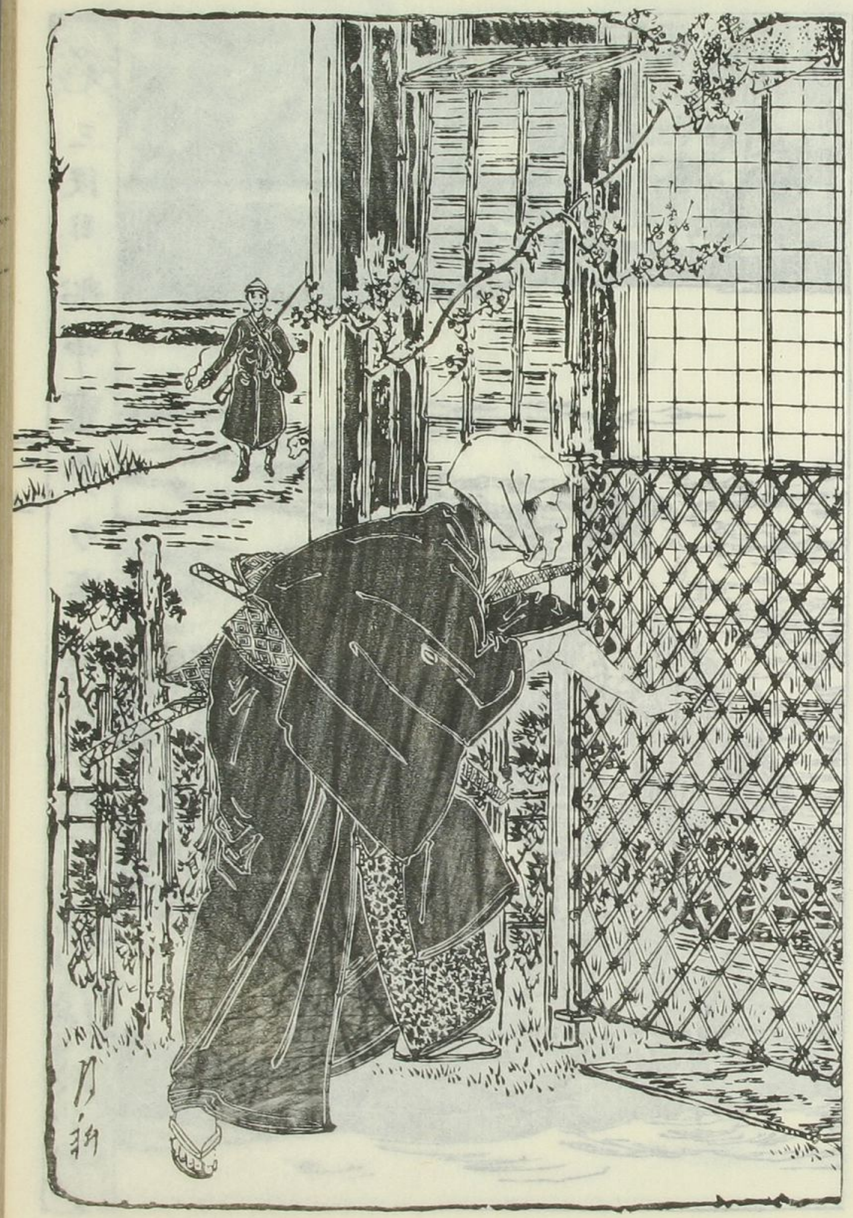
名花摧落亂雲叢霹
靂一聲紅血何止
故山孤月冷吊乾坤
衰不悲風

戊子春二月 逐波居士中島蕭

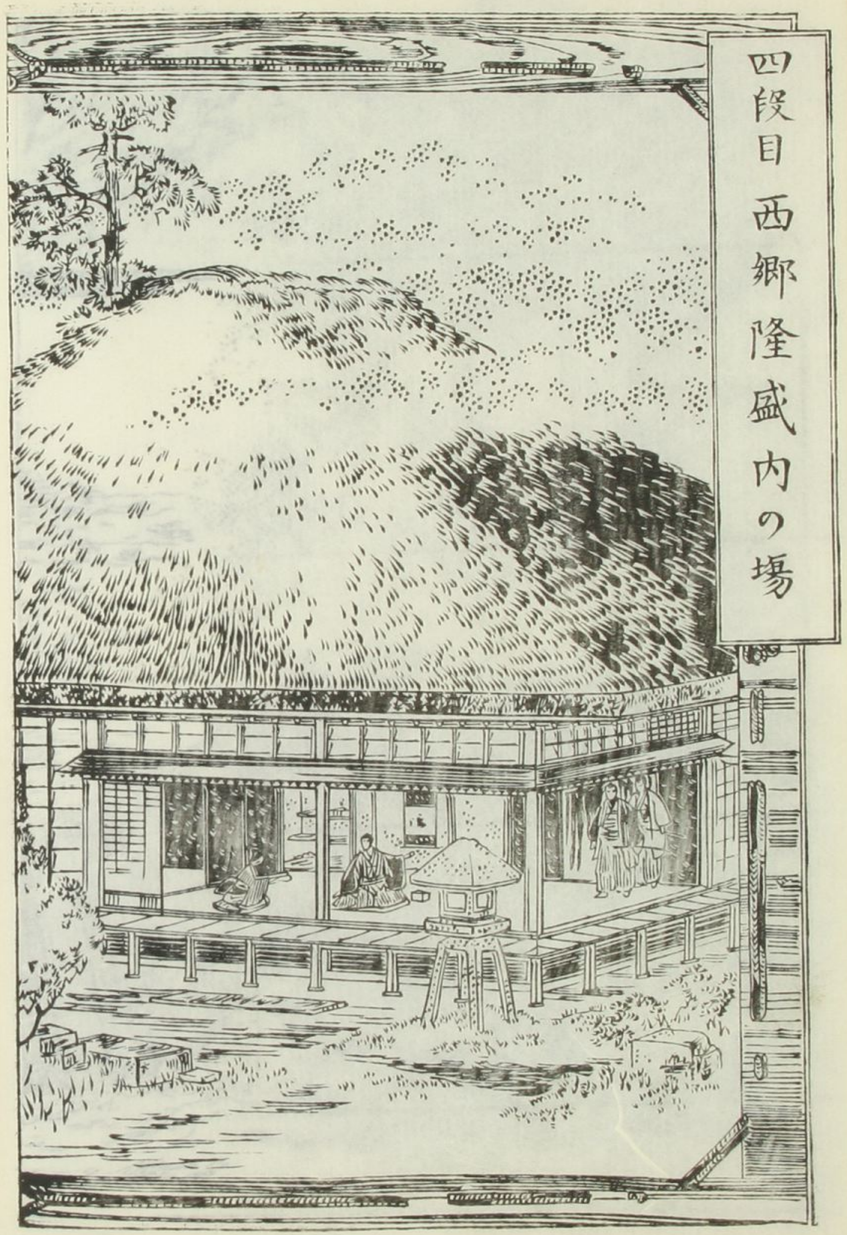


初段目　鷹島私學校の場

二段目
松本別荘の場



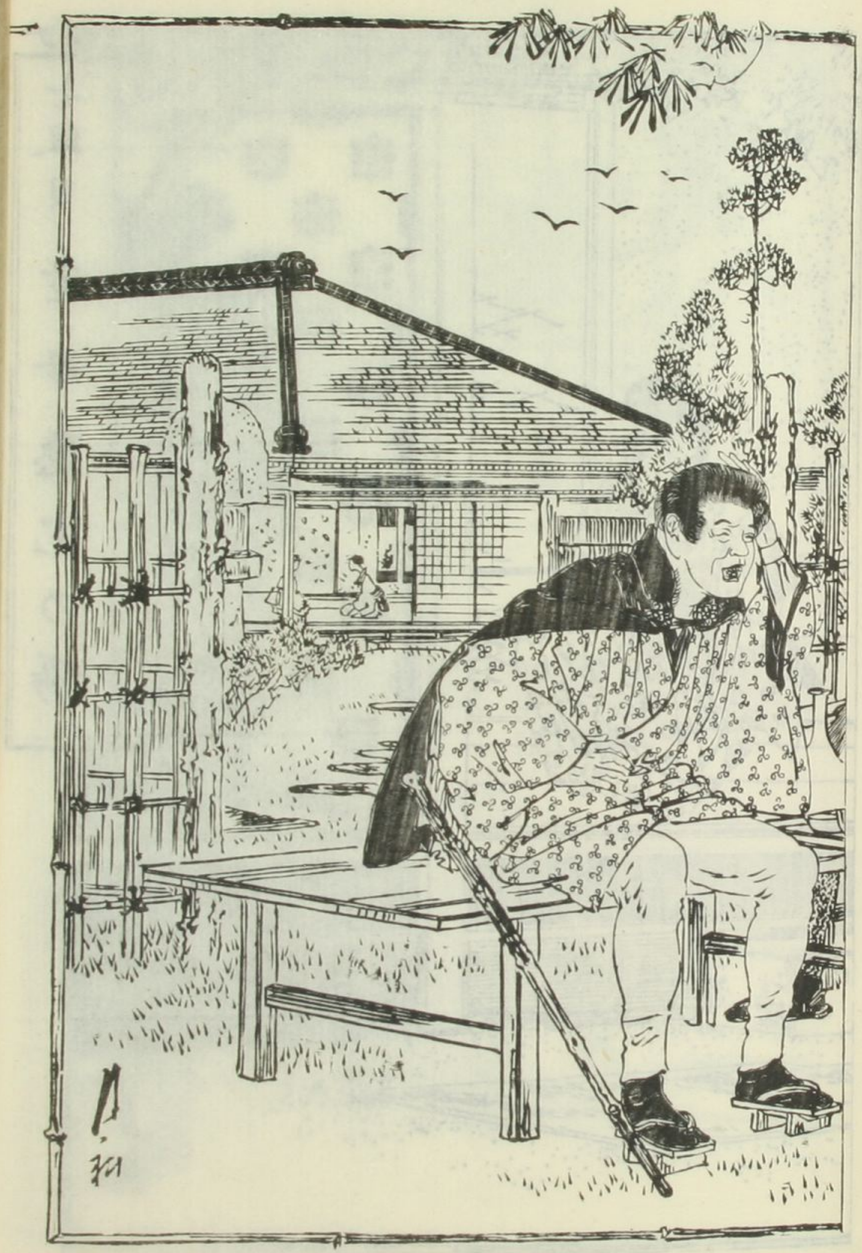
三段目　船中靈夢の場



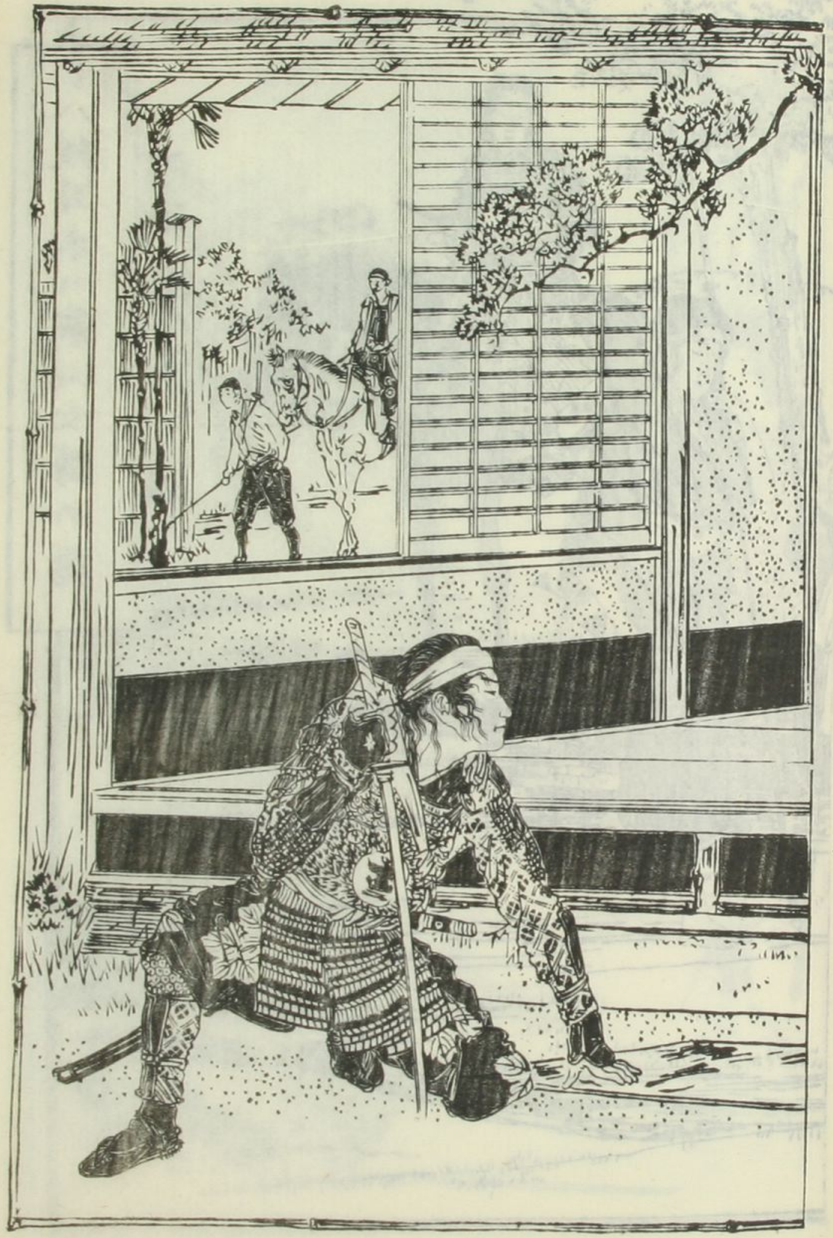
四段目　西郷隆盛内の場

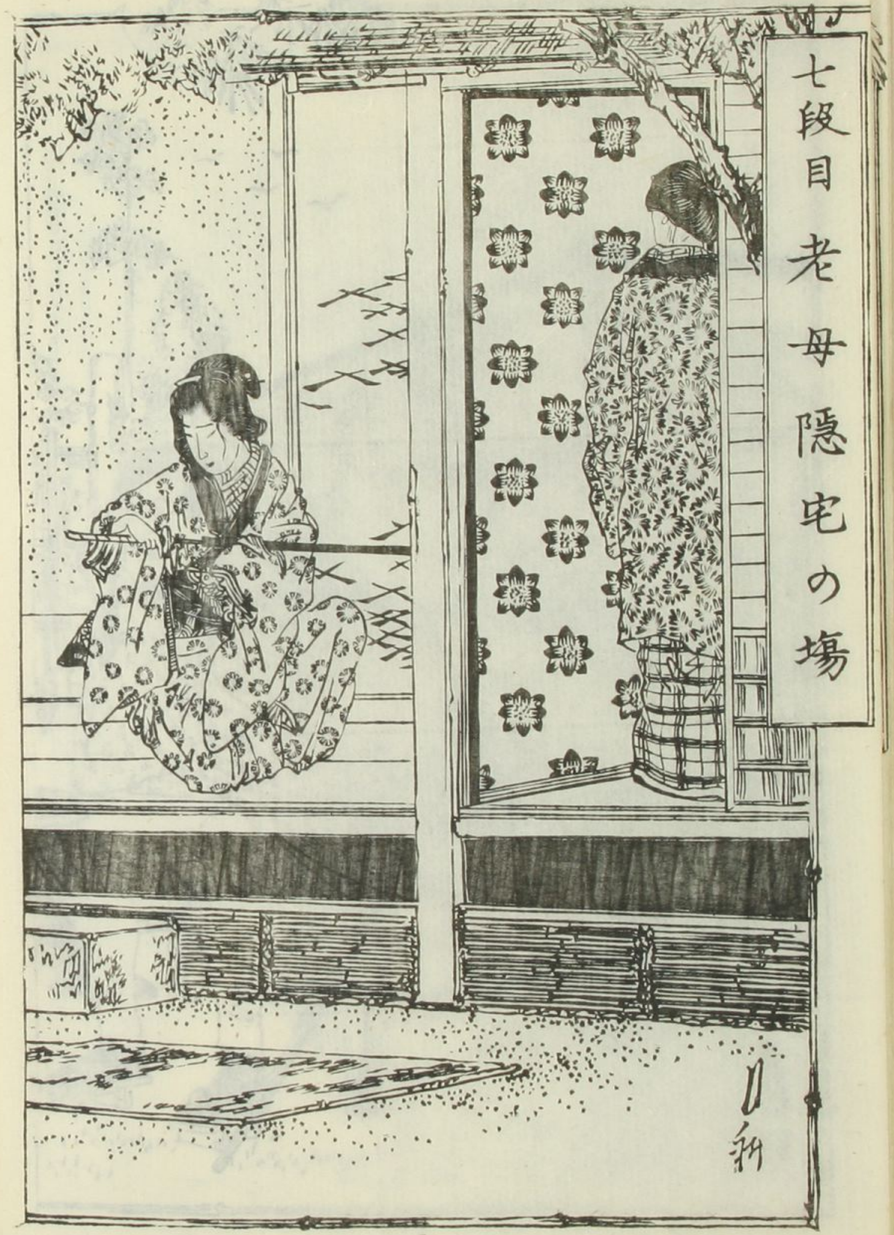
五段目

隆盛出陣の場



六段目　三人上戸の場

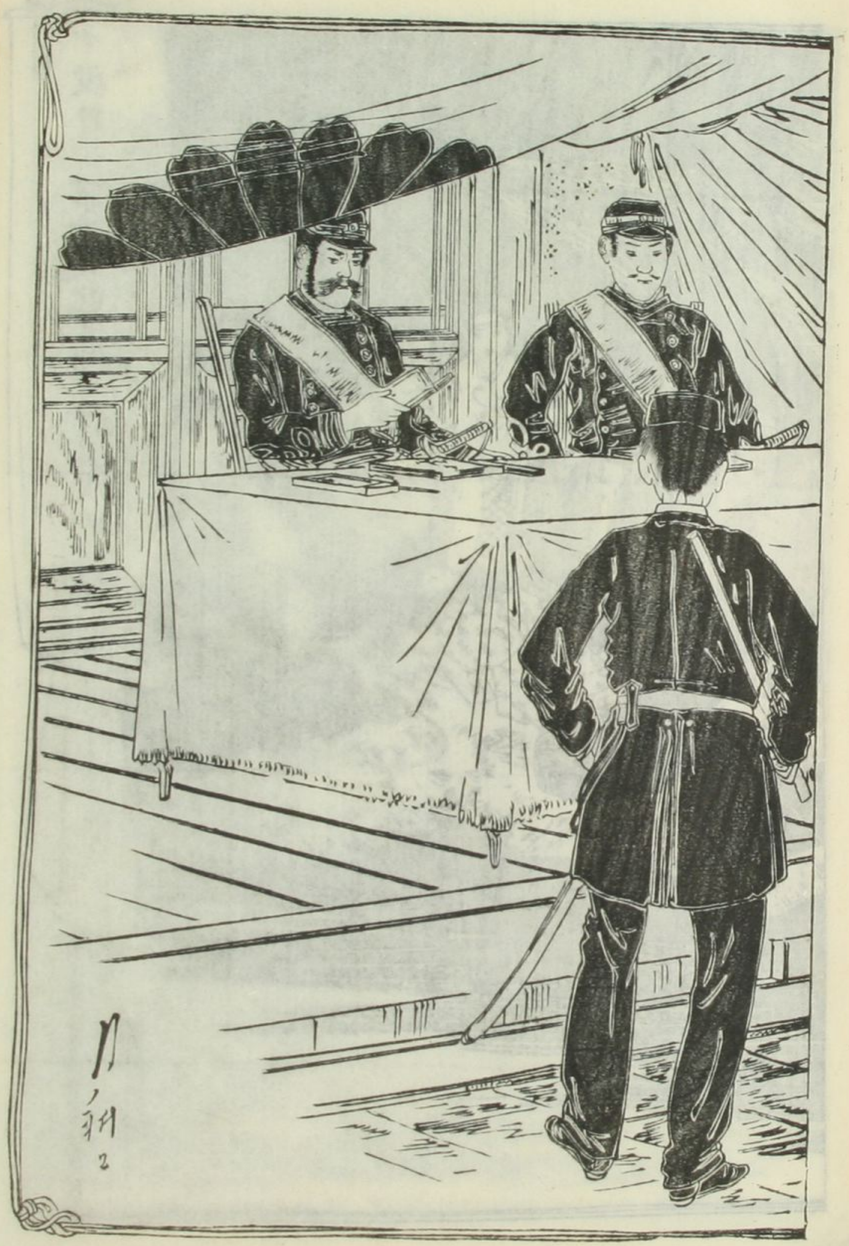




七段目　老母隠宅の場

八段目木の葉山女隊の場

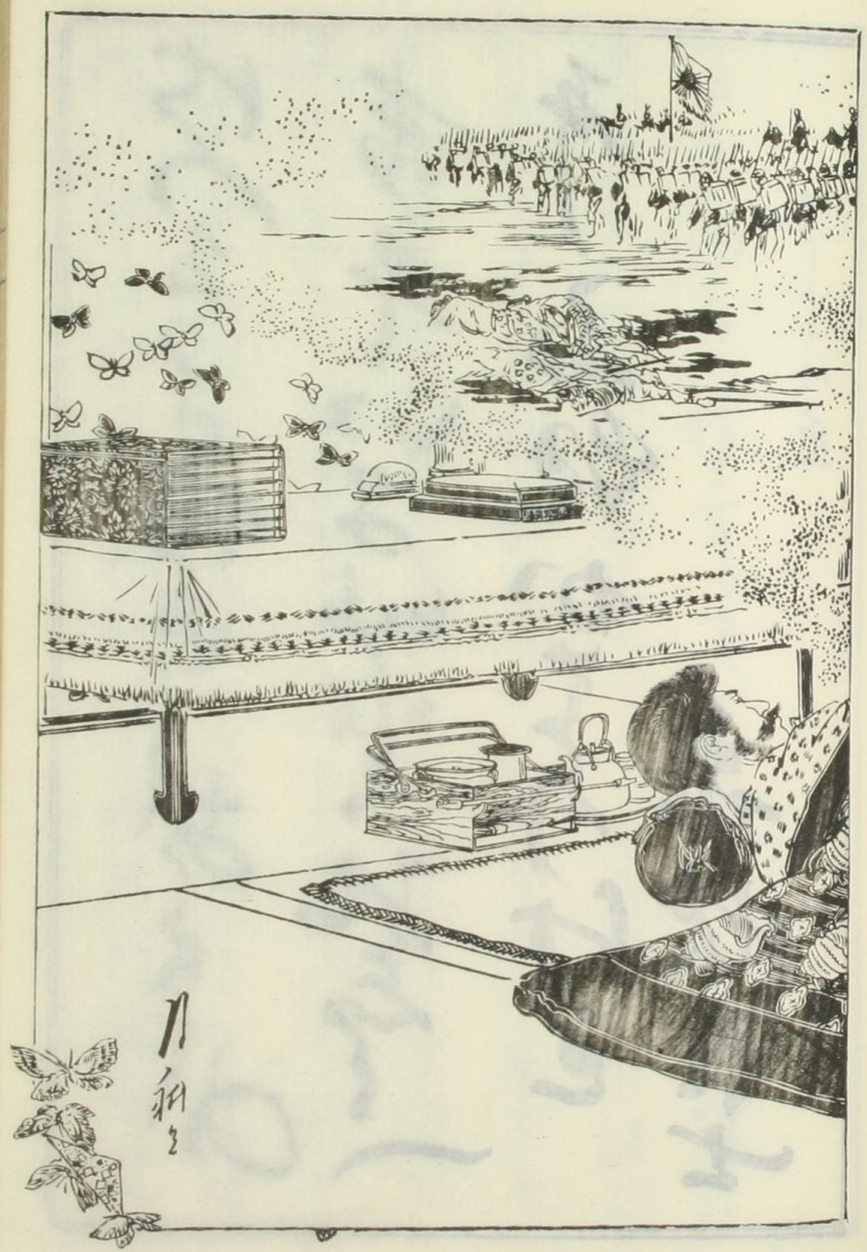
九段目　囚人忠作詮議の場

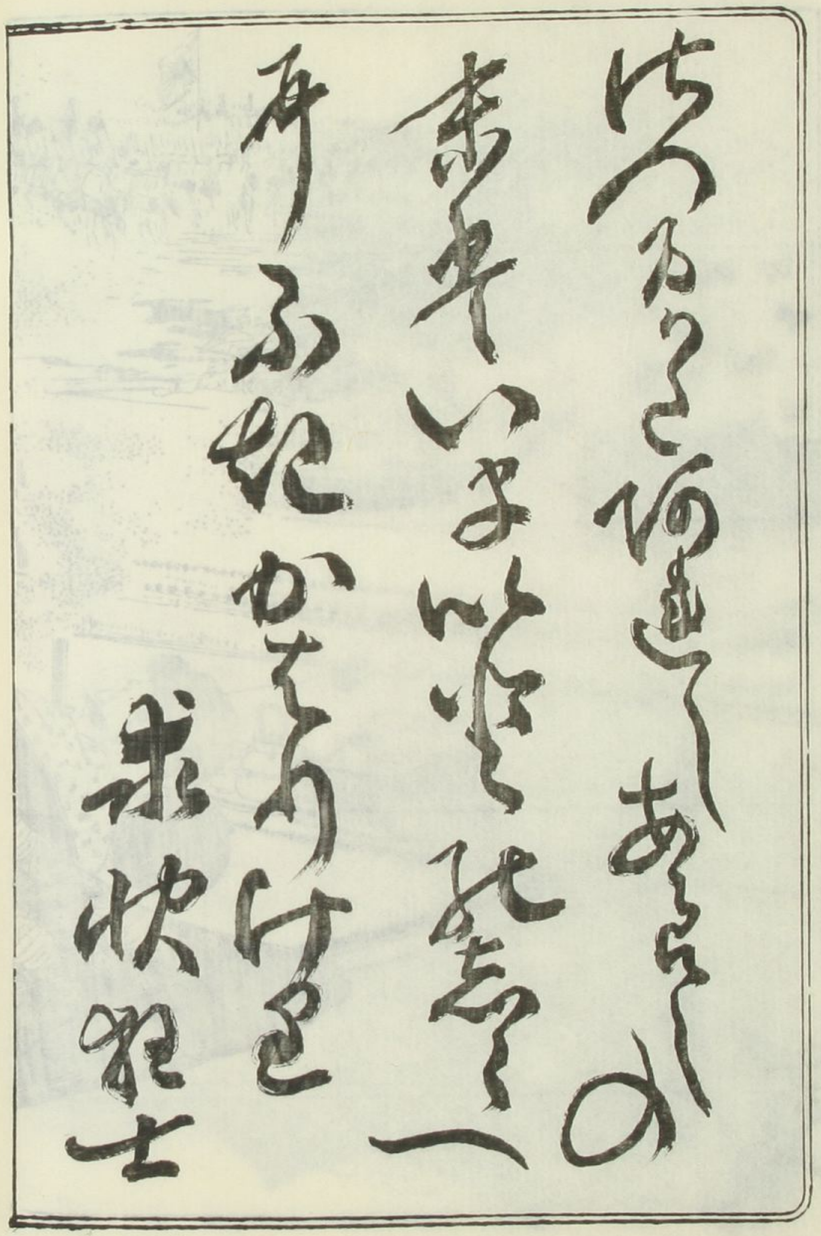


十段目　逆徒塁中評定の場

十一段目　賊将討死の場

十二段目　西郷隆盛夢の場





たちも涙まれて云らく西公以れはちる前に川
てる物くれつけをそとまて学さ給ふる
それ云の葉を糸以にのほ〳〵て人を思ふ人のこゝろ
を尋ねくる古きためしもあれ発投を思ひ
出も〳〵つくさい梓にあくることをはなれぬ
四五十年二月
くさたかまをしる

A272

六段目　二婦旅中之相談
七段目　一人鼻飛之述懐
八段目　女隊軍議之活潑
九段目　山間きくの之討死
十段目　逆徒塁中評定の場
十一段目　賊将討死の場
十二段目　西郷隆盛夢の場

目録畢

初段目　西郷隆盛之閑居　私嚢生徒之暴動　鹿島私學校の場

柳田泉文庫

八隅ありまして大君の。御代はかぎらじ日の本をなれ
あきらかにをさめんと。ちなしき御筋とらせられ。光
輝くぶんめいの。ひらけゆく世のありさまは。あくを
ありぞけぜんをあげ。皇澤雨のごとくとや。仁恵民を
うるほして。都も鄙もいちやうに。ならふ竈にたつ烟。
草木もなびくみつぞと。あほぎかしこみしゆくし
けり。水の性清きを欲れども。砂石これを穢し。人の性

平かを欲れどゝも。嗜慾之を害すとかや。されば西郷隆盛は身を故郷の月花にまかせあがらも國のことをもふ〳〵ろのつのりてやう。あらたにたてし私學校。ぎうるいのけつかうくわびにあがれず。わく〳〵ゆかしくぞみえにけり。きゆうきんの壮士れうをたぐし。かほりはきらぬやまと武士。さもおやうふのすぐやきば。そのきれあぢをこゝろみんと。こゝろのうちにもやす火の。烟ぞうとにあらそれたり。玄関の若者両手をつき。たゞいま池上四郎様ごしゆつしゝありと。まをしつぐるあいだもあく。

帽子ぬぎすて池上四郎。れうぢにむかひいちれいし。拙者ゆゑあつておそなはりましたが。いつぞや西郷殿はゞめおのく〳〵と。ごみつぎんまをせしこと。いよ〳〵らんどぎせつたうらい。ときくより國幹耳をそばだて。あんとれいやる。スリヤ新政ほつきのときいくうしとや。シテそのおさいはいかゞでござる。さればきんぬる廿七日。當港へちや〳〵したる赤龍丸へ。こゝ〳〵ら彈薬をつみこまんと。あまたの人夫をもつて船ちうへはこぶをりから。かねて別府氏のきしづにて。當校生徒千餘人。その彈薬をうばはんと。めい〳〵えたる大左

刀小太刀。ぬきはあーして路をさへぎり。弾薬のごとうばひとらんとす。こんてう生徒らようちいさし。かたくもつてぎがんをうつべし。はかうずちさんいさましーと。あかーあんとさくちよきさくでをごぎらぬかと。ゑみをふくんでのべければ。桐野利秋すゝみいで。あるほどせんこうより當校の。資本とゝなへ豪家へこうつけ。金さくなり。弾丸火薬をうるといへども。ことをおこすにたらざるをもつてから。はかうず弾薬の手にいらーは。さいそくひあつとよろこぶべけれど。ひつきやうりやーだうのものよみ。かくのごときは西郷殿つねぐ書生らへいまーめられしーことあれど。いまも西郷殿大隅よりかくらんおもひやらるゝと。眉をひそめてつぶやふてい。池上四郎ことばをはげまし。これもしたり。桐野氏。なんのわろれしーきわろびらひあるふ。たとひ西郷殿いまーめられしーことにもせよ。りんきわろうへんはぎどうがうたろうも勇士のあらひ。ことに金銭衣服をうばひしーにあらす。弾薬ふどをうばひしーを。國家をまもる一のてだて。いさゝかはづることあるまじ。かなうずわきづかひあられふと。いさみをつくれむ別府晋助。そのさ

くこそそれがしが。かねて書生らへさしづいくせしことなれど。西郷殿のいにたるびひ。まつさくとなるそのときを。拙者の一身にひきうけまをさん。ごろんばいあられなと。鉄石心をあらはせむ。篠原國幹ことばをやそらげ。いま御両所のかくまでふんぱつあることあれど。桐野氏貴殿もいつさうごふんぱつあられよ。たとへ西郷殿。なにやうにいもろ〳〵とも。かくあるうへはぜひにおよばず。このきにたるうへはからふやう。めい〳〵いちどうせまらうでもござらぬかと。顔色ゆうきをあらはせむ。桐野利秋はたと手をうちぬかにもさやうつかまつることにさうらう。けつすべきときけつせずば。いつそそけつするときをあるまじ。あからだをたとひ西郷殿。ことひなりといえるとも。わの〳〵と共にせまりきたらんとき。ようちどうことばをそろへ。これでござそ水魚のちかみ。ほんいをとぐるを瞬うち。ようさめる面色みありてたけく。げに西南の四天王とせに名をあぐるもことわりなり。をうから表へあをたづ〳〵。砂をけとばしかけくる足をと。コハいぶかしとめいくを。刀かざす手にて

かみの庭さきへ。桐野が郎等宮崎精。いきをきつてかけつくれむ。桐野利秋こゑをはげまし。ヤアよのつねならぬ汝が面色。やうすをいかゞ。ちさいちなんと。つぶさにかくれとよばゝれむ。ハツトおなきり両手をつき。こんてう當校の生徒二千餘人。草牟田の造船所をとりかこみ。鯨波いちじに門外へ。どつくがごとくにたちむかふ。宿直官員河邊行廩。庭さきに仁王だち。だいれんあげてよばゝつ。ヤアとうをくんでぶさほうに。あつまりきるもなにものぞ。ちづかにおじやうをまをされよと。とみどきかせどきかず。抜刀ふりをてみだれいり。弾薬とうそうだひとう。かちどきあげてひきとつこう。かくこゝろえしは鎮台より。まさの兵をくりだすやうす。まもなくこゝへおしよせん。ふせぎのごとういしかるべしと。いきつぎあへずものがこる。きくよりめいく顔みあはせ。ちばしこそばもなかうしが。篠原國幹三人へむかひ。かくさいこんのことなれば。西郷氏へかくのちづいをはうちいこう。當校ばうぎよのようういをいたさん。桐野氏を當校に。そどまりごしゆごさるべし。別府氏池上氏。拙者も御両所とともに。かの地へかけつけ。生徒ど

もへきさいくさん。いづれもいかゞとだんずれだ。三人いちぐうこゝばをそろへ。いかにもきやうつかまつらん。桐野氏ごくらうなぐら。當校ごほごたのみいる。コレハくいをみいろ〳〵るごあいさつ。わの〳〵がくにもかの地の御手配なにぶん よろ〳〵うたのみまをすと。れいぎみざさね勇士と勇士。胯の股だちそろ手もはやく。表のかた〳〵へいそぎゆく〳〵。

二段目

病床菊野之愁嘆
山獵隆盛之篤志

松本別荘の場

かぎりなきあさけの海にうちよする。浪のうねく〳〵鷺鷲の。あかむつまどき春のゆめ。さめてはかなき床のうへ。菊野をひとりおきぼれて。枕をはなれおきあがる。それとみるより下女おまき。お嬢さまおめざめあそばしましやう。おかぜめすなとかいまきを。かひぐしくもをちまをり。ごきしんくをいのぶでござります。といつそれを。ヲヽおとしてをまる。さくしやうれしうおもふてをります。さう

なぐらおがくのこの病。そもほんぶくをあるまじと。おりへむこの世をいとゝもられて。なにたをのしみもおき身のうん。ヲくお嬢さまなんとおつしやる。この世をいやとおぼしめすとふかきおこゝろあらん。つひごながらとゝくよう。おねがひまをすことがござりまする。ほうのこくでござりませぬ。けさもお醫者へお藥を。いごきにまいりまして。たれぞ。お醫者さまのいこゝろにを。松本どのをけんごあるきしら。まかるに娘ごの病を。そぐにいくる戀病のなぐひおらんと。とくより胗察をそれぞも。をうにそれ

とみとめざるゆゑ。がいなき藥のみあゝへておけむひにまいすいどやく。ぞんめいもおぼつかなきいまのありさま。ぜひとも娘ごのおなおしきおたのみ。とゝくれとまゝきおたのみ。とゝくもいろぞやようおまへさまが。ふかきおのぞみのあることより。おうし御病氣とおさつしまをし。ものよそへておたづねまをし。そのうちにそうちあけておはあしかと。けふまでみおをしてをりましられど。ひごろうちばのおうまれつき。とけさやうでもおへぞてあそぞし。おぜうちあけてくざりませぬ。ヲゝもいまをゝ

たけくれど。わかいときをなまけのみちに。ずいぶん
くらういくまーて。おまひもがてんーそ
おりますれど。お嬢さまのおころろざし。およざず
あがらおちからになりまーやう。たいせつなお身の
うへものことがござりまーてを。親御さまへの
ごふかうのみう。おのぞみまでもかなひますまい。サァ
あからさまにおつーやつてくださりませと。人目ふ
けれむせまりける。菊野をいまさらはづかーく。さー
うつふひていうりーが。やうくころおーまづめさ
ようふとみてたのもんせうにほざされ

て。いまうちおけてはあーまーやうおりひまそせむ
去年の春。夜學にかよふそのおりふー。つひちかづき
になつてより。歌のてんさ〳〵詩のすいかう。たがひに
たのみたのまろ〳〵。そのおんかさを熊本に。きせつも
たかき池邊さま。たがひにこころありそ海。ふかきお
もひをかきおくる。筆のいのちも毛をしげく。袂へそ
つとはづかーやと。顔に袖あてやうありーふぜいな
り。あづうをきいて下女おもうあづきながらひら
みまぎらー。ホヽそれほどのことあれむ。おうづらひあそ
ばすまをおようびませぬ。さいをひその池邊さまとう

まをすおかくされ。そこ〳〵の爭が恩ある人。なひしやう
もあけてくらさるあかなれむ。おひきあもせまをし
まーやう。まをし〳〵お嬢さま。おふみをおまへめあ
そばせと。硯さし〳〵つけすゝもれむ。スリヤそのはか
らひにて。池邊さまにあをしてたまるう。きりなぐら
そつぞや池邊さまより。くぐきりしおふみにを。ふか
きのぞみのある身のうへ。おせうをまてよとすげふ
いあつせ。そのうちいつかうおたのうも。サアそれな
れでなほよいつがみ。これよりそく〳〵が一はう。い
てまいりまーやう。サ、おふみをとせりたまれむ。や

うく〳〵筆をとりはじめくろのたけの百分一きく〳〵
とかきおもう。ふうじそく〳〵いぐせむ。おもう
けとりお嬢さま。さやうあれでいてまいりますると。
帯もあほーたちいでしがたちどまり。ア〳〵戀に上
下のさべつをあいと。ほれさくろをあーしさのの
うと。ひとりごと。こころをのこしていでゆく。かゝ
るそこころへ飛石づたひ。手をこまぬひて父隼人。おあ
んありげにいりきたれむ。菊野をそれと硯箱かゝづ
けあなほる。をりこそあれ後ひきあけ坐にあをり。く
娘きのふからなたやかや。いそぎのことにとりまぎ

れ。容躰もそざうしぢ。食事をすゝむぅ。きぶんをうじや。ハイ〳〵父さまのもつていなこゝろづかひ。なが〳〵しきこの病をほうかねろそ前世のがうはう。そのやうにいやつても。女房にを死ろうれ。ろが手でそぶてさそなゝさの身のうへ。きんをいせいでなんとせうぞ。それをさうと病中のそなさ。きにさそるでもおろけれど。ざんじのあいぶをさんばうして。この父がまをすこと〳〵ろをもづめてきいてたも。かねてそなゝさがをさをきときよう。三浦仙太郎といゝあづけ。

その〳〵ちいまの御代とあり。たがひに家禄をほうくどん せーぢ。三浦がゝさを火難にかゝり賊にあひ。だんぐ身代のおとろへ。いまになつてそんぐみの。やくそ〳〵をへんじてそ。ぎりたゝずとおもふてみるうち。三浦かさようこんみんの。さいそ〳〵あることたびぐあれど。そなさの病氣をいゝたてゝ。これまでのばしておいうれど。いよ〳〵せまるこの四五日。のつぴきならぬけふのありさま。そふ〳〵の母にゆかりある。仙太郎が家のをちめをみすてるをへたい。この父のみうそなさまで。ほかのえいぐ

に目がついて。義をするとおもはれても。なんともたゝぬけふのあさまつ。こゝのどうりをきゝわけよ。女房をなくしたるさ一人。そなたをおのふ父がこゝろ。かあいかろうにくかろう。すいうやうしてくれさがよい。こゝろにすまぬ夫さぶめ。いやであろがとくしんして。ぜひともこんみんしてたもと。ぎりとをんあい百千筋。いちづにせまるうちぎの涙。娘を顔をふりあげて。アゝもつたいあい父さま。ことをわけてのいまのおさとしふがてんがまいりまし。こゝろにすまぬそんだんあれど。うきせにあれむぜひもあり。

おほせにさふがひ嫁いりをいそまいやう。これまでのわづまし。おゆるしをされてくださりませと。おさえいそずふしさずむ。あらだ。泣にをおよぢぬ。サヽ泣やめよ〳〵。病氣にさをりてをわるいぞや。よろきしいれてくれさな。うれしいく。もうく。あとはいやんあ。きのかそうぬうちさきへもちせて。こんれいのさんをいさん。菊野さんばとそちあがれど。父のこゝろをしかぬる。ひかげの雪を飛石づたひかくる父親みをくる娘。菊野をあとにうつとう。一間にさをしめひとりごと。いまご

ろを池邊さゞ。どこにどふしてござるぞ。おりひまをせむ二人がなか。たゞひにおりひわのそれつ。二世の扨をかをさねど。すゑを夫婦とやくそくを。筆にいもしてこの年月。たのしみくらせしかひもあく。こゝろにそまぬ夫がさね。いやといやれぬうき世のぎり。つひかりそめのとくしんを。まうけにあされど父うへに。きゝだち死ぬるふこうのつみ。おゆるしなされてくだされませ。こゝろのみさほをやぶりてと。戀人へぎりをくず。まゝ戀人にきつぐだ。だいをんうけよ父うへの。面をけがす身のいつぐづ。この身一をうしなへむ。いゝなづけあるその人へ。つゝわけもきち二まそ。いかをしゝ戀人へ。女のみさほもきつぐり。けふをめいどへたびぢと。かくごをきめてみながらも。せめてもいちど戀人に。あふて死らくと。身をふるたしきるくぐき泣。墓もぬるばかりあり。かくて池邊吉十郎。下女のおがうつぐふみ。よむとそのまゝきもそぶろ。人目をつむほうかみり。せめていちどのあふせをと。中庭でひきひよう。きのんでようすをちぎくとも。きうぬ菊野を泪をおさへ。そてもうの世でそれぬあくそん。人のをきまに

ヲヽさうじやと。よういの懐剣(くわいけん)とりいぐし。すでにお
がいとみえけるところへ。襖(ふすま)ひきあけ父隼人(はやと)。はしり
よりて刺手(さしで)にすがり。ヤレ娘(むすめ)はやまつさ〳〵そく
れなと。泪(なみだ)ながらにこぶしむれだ。菊野をびつくり。ヤア父
さまゝめんぼくない。さいぜんよりのひとりごと。ヲヽ
せんこく一(いち)そんかんれんも。こゝろもとあきそなさ
のそぶり。きづかはしさにたちもどり。いさいをのこ
らずをちぎ〳〵さ。これ菊野それほどまでにこのお
やぢを。をも〳〵くれるこゝろざし。くはぶんなぞやう
れしいぞよ。さうなごういまをなさが。みごうち死(しん)ぐ
なら。よからぬことにきがまよひ。もなう〳〵と死(しん)せ〳〵と
人のうる口。それがくやしい口をしい。これまでそあ
さがおのふその人。イヤサおのれひをこらせ〳〵めいどの
をびぶち。もなう〳〵とむるも親のむごひ。コリヤヤイかく
ごよくな我手(わがて)にかけ。親子一世(おやこいつせ)のえんをきらん。とこ
ろあうげにいつけれど。庭の木蔭(こかげ)にたちぎゝ池邊(いけのべ)
でるもでられぬこのばのやうす。いうぶなるやとう
かぶひかる。菊野を涙(なみだ)の顔をあげ。アヽりつたいない父(とう)
様(さま)。そんならこゝろがさきだつねがひ。おきゝいれの
うへのみぞ。お刀(かたな)のけがれそゝぎもおぼつかなめさず。お手に

かけてくびきるとえ。あまりみやうががおそろしい。
らのばよのぞみをば一。ろくろのろうとばうにて。
あとそえいちばん涙ぐみ。西にむふて掌をあはせ。ご
りよがいなぐら父さまと。すこしもぞうぜぬそのあ
りさま。けなげのものやと父隼人。つゝたちあがりう
しろにまわり。ひらめく剣島田髷。ねうふつゝと断
切て。菊野のまへにおちにけり。娘をおどろき手にと
りあげ。コレまをし父さまと。このありさまをなにゆゑ
と。そこを隼人を目をちばたゝき。エゝなにゆゑとを
きくへぬぞや。そも女子の黒髪を。むかしもいまも首

ぞうやう。この黒髪をきろうへを。もはやそなたを我
子にあらず。うき世をすてゝ尼法師。そろまかせに
をびぐちしやれ。子とおもふねをゆくさきを。あんど
るうけもなけれども。おりひやろうと。胸をはり
きくおとこあき。菊野をいまさらかあしさと。まゝう
れしさをいつときに。身にひきうけさるむりやうの
おりひ。そんあら父さまられでいゝなづけのえんぐ
みを。ヲヽくこの黒髪をそなたを三浦へおさんいつさきだ。そと
ひらどやう。そをいふりのいけふかぎり。そなたにわ

かろ〳〵この隼人。アヽまゝならぬうき世じやなあと。
人目なければ膝すりよせ。親子手に手をとりくんで。
頬うちまもるひく〳〵の涙。ともにちをはくおりひな
う。かゝるところへ山猟でぐち。犬をあないに西郷隆
盛。中庭づゝいりきく〳〵れば。樹蔭にたゝずむ池邊を
おどろき。うろ〳〵へかくるありさま。目ばや
くみてとるめいちの隆盛。ひとりうなづきみまを
すおりから。あらじ隼人むいでむかへ。コレぐみぐるし
き茅屋へおんいり。かさじけあーと。頭をさぐれむ西
郷隆盛。アイヤまいどいでござやくかいにあづかる。さ

でけふものどかある天氣をさいわひ。山猟にでかけ
しところ。つれたる犬のたすけをうけ。かくのごとく
二疋の兎を射とめたれば。これより自宅にて。一杯くま
んとぞんずる。おつうへなくを隼人氏おうーあれ。
とるみをふくんでのべけれむ。これをまさありがさ
きおんおほせ。さうそくもつかまつるべきそうづなれど。たゞいま家内にとうみもござりますれば。こんにちのぎそくざりまをすと。いよ〳〵あさいのあるところ。さてる隆盛娘の菊野。顔に紅葉のおもてゆく。はるか末座に手をつかへ。コレぐようこそわたち

ようくござりまーさ。みぐるーけれど奥の一間へ。れそほうくござりませと。のべけれな。西郷隆盛ィヤナニ隼人どの。よのつねならぬ娘ごのやうす。なにゆゑなるぞとたづぬれな。隼人ハット赤面ー。額に手をあてこゑをひそめ。おたづねにあづかり面目なきぢいふれど。うき世のぎりにぜひもなく。親子のえんとめろともに。きろてはあせー娘の黒髪。ごすいりやうなきれてくござりませ。ッゥごろんろうさろーいる。それと目まぜてもきする隆盛。主人のこゝろをくみこる犬。はーりゆきて池邊の裾。噛へてひけを。ひかろー池邊。おりそずいづる中庭前。菊野をそれとみあをす顔。そびたろおりひをおーちづめ。おなつかーやといなさも。人目のせきにつゞてられ。顔にもくろ紅葉のいろ。つゝみかねて顔そむき。目ゆくにものをいすれな。おゞおりひの吉十郎。おばらくうかりたくずむふぜい。みてくる隆盛こゑをかけ。ャアめづらーや池邊氏。拙者其元におりいつて。たのみさきちきいもあれな。ごくろうあがら拙宅へ。おたちよりくぎされよと。ありけれな。池邊ィハット頭をさげ。こをありがくきおんおほせ。こよいをかならず出屋敷へ。まか

りいづるでござりまーやうと。ひとうなづき唾を
のみこみ。よひのきーほと。もくれいー。こころをの
しーていでゝゆく。ヤコレ娘ご。親子のえんをきりさげ髪。
家をいでゝ汐すて小舟。たよりあきおことが身のうへ。
きづかひさるなおよそずなごら。拙者ひきとりお
せわいくさん。かならず我家へきられよ。けふをあ
ほれー花の色。まさ水あげるてぶそもあらん。ハヽも
ちや日も西山にかくさむけなむ。イザかへらんと西郷隆
盛。胸にいちもつ寛仁大度。こころをのこしてたちい
づれど。みおくる隼人。菊野もともに。庭の紫戸にそ〳〵
ずみて。かげみゆるまでのびあがり。うれー涙にくれ
の鐘。花やちるらんかりそめの。親子のわかれ顔みあ
そせ。まをしー父さまこれがうまする。ヲヽ娘でないようその世のおわかれでござ
ぢでといゝさして。あとそなんともゆふまぐれ。奥と
部屋とくもれゆく。

三段目　船中隆盛之物語　船中霊夢の場

夢邊月照之諫言

入相過。こゝろも鹿児島磯の濱。月も雲間をいで汐の。浪を粧ふ薄煙。なびかにほんの櫻島。なごめつきせぬ景色あり。西郷隆盛たちどまり。ハア江上の清風山間の明月。ハテ〳〵ちよき景色ぢやなあと。眺いれた篠原國幹。いきあひそうずるこめ三人。かの赤壁のあそびにならひ。船に一夜をあかさうでござらぬうと。ろみをふくめど桐野利秋。かねてやせ〳〵せ〳〵ごと〳〵。せ間をはぐかる今夜のひやうじやう。櫻島の沖へこぎ

いづこ。うちかゝらんも水魚のちぎみ。イカニモ〳〵ゆるく〳〵ひやうぎいくさんと。かねてようゐの酒肴三人めい手ごさげて。千鳥足もやう濱づたひ。浪打ぎわへたどりつき。船の纜解すてゝ。十町だより漕出けり。桐野利秋西郷にむかひ。このたびわたくし私學校生徒の暴動。貴殿をさゝめて苦々〳〵おぼしめされん。さりながら関東がたのふるまひにおいて。すておきがたき一事あり。貴殿をいましめうてござんしあきやと。ことばたくみたとひかれた。隆盛みなをり膝すうよせ。フウそのちさいをいかゞでござる。イヤナニ篠原氏。貴殿よりか

のちぶい。いさいつぶさにおはあーくざされよと。ゆ
ずる利秋語をつぐ國幹。容をあらためる隆盛にむひひ。
されざさるろ関東よう。かえりー警部めんしゝゝ
の數名。いぶかーきやうすのあるより。そのすぢにて
とりをきへ。きびーくせんぎをとげーところ。貴殿を
はじめ我くを。暗殺せよとのたいをうけ。きせいの
名をかりきゝりーむね。はくぶやうせーゆゑ口供に。拇
印をいさせ入獄せーめ。貴殿の御帰宅をまちうけ
まーてござると。きくより隆盛憤怒をあらたー。髯揉
あげてござるふるえー。ヤアひきようなりかんねいど

も。もをやこのうへをいうよならず。イデ兵をひき上
京ー。かくのちぶいをおんもんせん。各々ごよういい
さされよと。丈夫のけつだん満面に。いさみの色ぞあ
らわれけり。篠原國幹横手をうち打。コハあつぱれあるご
ふんをつ。これにあまされる手段あるまじ。よりなぐら
こにひとりのなんぎ。第一関東へむうふにも。肥後
の熊本をすぐるこそ順路あらめ。まかるに兵卒をひ
きつれあむ。熊本縣令あるひは鎮台司令長官。それ
の通行をさへぎるこそひらじやう。そのばにのぞま
だいかぶいさんと。眉を顰てうづらふ体。桐野利秋

そばをはげまし。これもさうう篠原氏。なんのうれしきごふんないなさるにおよぶず。いやしくも西郷殿て陸軍の大将。その大将が兵をひき通行いたすに。なんのとがむるだうりやあらん。ゆゝまさとがむるものあらむ。條理をといてあいさつさん。シテまさきいれぎるそのときを。ハテぜひにおよぶず絶體絶命。おやぶってとほるぶんさ。ハヽヽ西郷殿いかゞでござるか。ホヽウいまたはゞめぬことながら。桐野氏のごふんぱつ。いきぎよきことでござる。のう篠原氏。さやうく。おからむその議にはけつすべしと。めいやゝひやうぎのとゝのひし。そのありさまを唐土の。ちかひ名高き三國誌。げにもかくこそとおもはるゝめて。おからむ西郷殿。一議けつするうへをきをさんと。數獻おすゝめあられよと。盃とつてさしいぜせむ。いづれもごめんくださるゝと。とりあぐる盃に。うかむ昔のうきかんく。グット一口飲干て。さやうあれば桐野氏。うよぐそいまをすときいざし。隆盛両人にうちむかひ。拙者いぜん月照と。幕府のために其地彼地。のがれまかりあらまほしを。一とほりかうりまをさんと。きいて両人くらばをそろへ。ソリヤめづらし

きおんはあゝ。まつれいかぐらしょのういたすと。のぞみにおうじ隆盛を。扇をもつて身づくろひ。そもく某のまうしに。指を屈てかぞふれば。年をさること十三年。王政復古にいさんと。ちかひをやくせし我友を。清水寺の僧月照。かれもふんをつゝまず。千辛万苦にこゝろをくだき。ひそかにそうめんとぐるのきそ。みつぼうはやく幕府にきこえられ。討手の手配其地彼地。はや関門きびしく鎖うくをした。おづやうならざるありさまを。おつに覚の沸ぐらく。ともにほうんどたうまくし。其時両人姿をかへ。虎口をのがれてやうくと。古郷へかくれどくもまと。鰐口のごときあやふき輪縄。名もなき匹夫の手にかゝり。むざんの死はぢさらさよう。波間へ身をなげ鱗の。腹を肥がよからんと。拙者をはじめ月照も。かくごをきめたるうへにて。船にお乗潜いでし。その夜むさながら今宵のごとく。月をさへゆれどさえやうぬ。胸の漣おようする。渚にひびく鐘のおと。ものすごくこそなばへけれ。かくて某月照にむかひ。サラバこの世のおりひでに。まつごの盃かたさんと。とうぶす土器手にとりあげ。たゞひの胸を梓弓。つよきこゝろも君がため。す

つる此身をいとをねど。これまでつくせしちうせいも。泡ときえゆくえやと。歯を喰ぢうむねんの涙。さらでとながひにいざきあひ。ざんぶと海へ身をなげう。それとみるより。船子らを。あそてふためき。二人をひきあけ。かいはうおろかなりしゆゑ。拙者をつひに蘇ど。月照ひとり黄泉の。きやくとありぬるかあしやと。涙ながらのものがたり。あごうきみるも篠原桐野。ともに涙をかきいろ〳〵るごもんう。それ〳〵も落涙いたし。ちかしられよりあらためて一盞くもん。まづく西郷殿。イヤまづ篠原殿。イヤまをさでお羊やく。ひらにまづ西郷殿。さやうござるで。いづれもごめんくださるとあぐる盃に。しやくとる桐野篠原も。たがひにちよく。船の艫を枕として。そのまゝそこにお卧けり。ちやくにふけとる。浪間に月のかげあらそ。昔の姿あらくと。あらもれいでたる僧月照。舟の艫先にすつくとたち。隆盛殿〳〵とよぶごるにそ。隆盛をむつくとおき。いぶかりあごらこゑをかけ。コハめづらしやそのむかし。そもにちかつて月照殿。ちよしすぎにそのむかし。

身をあげしが。貴僧をめいどのきやくとあり。それがし
ひとり存生て。つひに復古の御代となし。ふたゝび春
の花ざかり。國に耀く錦の袖。名も隆盛とちようしん
し。よろづのせいじをあらたまれど。廟議我いまあそ
ざるより。官途をおしてふるさとへと。みなまできう
ず月照も。つかりの面色あらゝげ。あゝまちもれ
ちう。隆盛殿。そなたとうちわれとそのむかし。さには
つて王政の。御代になさんとかんなんちんく。それを
むなしくはんとみて。めいどのきやくとあうしろど。
一念この地にそゞまりつ。皇國をしのごするかひあ

つて。めそゝくふゝくこの御代とあり。さに聯沼をが
すべきに。そなたがまんのぞうちやうし。汚名をう
るもかへりみず。錦旗へむひほんぎやくをくだ
てもとゝなにごとぞ。萬物おのくかぎりあり。日もち
うすれでかゝむくぞ。月もみられで缺るぞや。そなた
がまゝも國政を。あらためんとおのひもようず。か
くあさましきそなたにてをあかりしがよ
ふてくらみーう。みさげはてるコナく躯者。めそや義
友のそんもこれまで。そなたの壽命も今年かぎり。む
ざんのさいごをとぐるをひつじやう。いま拙僧が

けんをもちひ。ぜんしんに翻らざ。かみを天子の宸襟をやすんじたてまつり。まつもなを萬民のくをはぶき。そのの名譽もまつさかんよからぬことにまぎひなむ。賊の汚名を世にのこし。はじめの勤王水の泡千日に苅萱あるぞ。このりをよくくかんがへよと。眼をいからし信義をこめ。いさむる涙はら〳〵。むらがる雲に月照の。姿をきへてなりけり。隆盛五體に汗をながし。おそろしさよとばかりにて。ちばしそばをおりけるそばに卧さる両人も。フット目さまし。西郷殿いかゞなされよ。よのつねならぬ御血色。なにさ。ハヽヽ

かりねのゆめにうかされて。ちゞれいせんばん。もはや東雲にほどちかし。夜の明ぬうちいづれもと。錨ひきあげ隆盛ぶ。揖とうなほせむ両人も。めい〳〵櫓櫂をそゝ。汀のかた〳〵へ。

四段目　几帳勇士之密談　朝夕養女之孝行　西郷隆盛内の場

こぎかくる。こゝに西郷隆盛が。閑居をまもる武村の一かまへ。老樹うつぜんとしてかやぶきの茅屋をかこみ。幾年ふりしありさまあり。はや明ゆる朝霧を。やぶる剛氣の英雄三人。さきにたつて西郷隆盛篠原國幹。桐野利秋。打連だつて入来れば。下郎を打葉かくづけて。コレハ〳〵みなくさま。まづくあれへとすゝむれば。妻の定子も一間をたちいで。コレハ〳〵ようこそおいで。篠原様桐野様。おかまうもあつて。おめでとうござんす。ござりまする。コレハごあいさつ。みなくさまごけんしやうで。きやうもあさくそ昨夜も。御主人のおとゝもつかまつり。磯の濱まで船あそび。つひに一夜を明し。はからずも今朝まさすいさんいたしました。ようござりまする。いさぎよくあきらめてもさぞおつれ。みぐるしけれど一間まで。ゆるりつとおくつろぎ。あそばしませとすゝむれば。両人顔をみあはせて。ちかごろおほせよろこびござりまする。ござんすかいなあひあらんと。奥の一間へいりみおくりて妻の定子。夫のまへへ両手をつき。昨夜をお船よぎよしあ

つて。さぞ〳〵おつかれでござりましやう。ちばらくおやすみあそばしませ。お裾撫ましよ摩ましよと。いさもる手先をおし〳〵のけて。ハヽヽこれをゝうなにをするぞい。以前の隆盛とそれちがひ。いまをほんの水呑百性。その百性の女房が。そのやうなやくしやうものであらう。拙者をともあれあまさの小民。雨風露身をひやし。かくうてたゝきん人ちやう。いやしきものを掟をまもり。汗をながしていきるかの。食をもとめて妻子を哺。さぞかんなんのおもひであろと。おもひまもせばそれ〳〵も。鋤鍬さへも手よとらず。つかれるあごでも勿体なし。ヤナニついでじやまよつていふてきかせん。コレたのしみをきをめるときを。つひにかなしみきる。さがなきあとをとりひらけて。名ようろいぐをつゝしみめされ。いまあらためてそなるた。そふてみさきこうろをくめがしに。そばをやらかぬる。ふかきこうろをくめがしに。そばをやらげそひかくれむ。定子そのじく手をつかん。コレハまさあらさまらてのきおほせ。なたごとでござりますす。ホヽウほろのうとでなない。ぜんたいまあ人間のたらともむべきを信義のこそ。その信義をまもらんみを。

まづ第一國がとまねをならぬ。その國をとまさんよ
を。上にあるもの下をあざみ。萬民のかんくをおも
ひやり。きせんのあいぶもつまづく。はげんで國産を
ふやさねばならぬ。たとへそなたを。一人の夫が大
切う。あまたの小民が大切う。まして夫をうしのふがか
なしいう。萬民のうんきやくをみるがかなしいう。サア
あんとおもふてみやるぞと。よのつねあらぬことば
のはし。なんとうたへもさざまらぬ。定子が胸よ焼鏡
をさしる、うちをぞうくをを。きしうふいてみた
うしが。胸をすゑて手をつかん。はづかりあぐらまを

しあげます。夫婦の死別をこのうへあきかあしみあ
れど。おほくの人のためならば。たとへ夫をうしなふ
も。身をうしあふもいとひませぬ。とさとやうた。おく
れげもあくのべけれど。隆盛にうことをみをふくみ。
ホウでかされうく。かの開明國のふうとして。夫婦
同権のならせあり。ハテア今こそおりひあうそう。
婦女子とそかろしむよあらずんどいたしさ。それでこそ隆盛が妻あれと。ほむるこ
とばよ定子を手をつき。ふうかあるを自がまをしあ
げうること。御意よかあよてかくしげなふぞんじま

す。シタガ これまでよおぼえぬおことば。おことのそ
こはかりかね。ふゝゝなんのつけもあいいらぬまんぱ
い。アゝ、拙者も眠氣をもよふせり。ドリヤ一睡いたさう
と。たちあがらんとするところへ。表口よりいきせき
と。別府が家来溝口太郎。文箱をづさん入来り。そらゝ
ながらこの文箱。おとりつぎくだされよと。さしいだ
せを定子そうけとり。コレハ〳〵溝口どのごくら千万。さば
らくそこにとたちあがり。夫のまへよさしいだせを。
隆盛手よそう打脉。ヲウ我〳〵三名へあてたるこの状。
なんなもせよ。奥の面へおもらせまをせと。言こゑ

もれて一間より。篠原國幹桐野利秋刀ひらさげたち
いで。席よつけを隆盛。くだんの文箱を両人のまへよ
さしをきこゑをひそめ。別府氏より我〳〵三名へ宛た
る書状。なんなもせよ開封いたさんと。いづれ文箱
のふうおきり。とりだす一通よみをそり。イザおの
くもごらんあれと。さしいだしてこゑをひそめ。總
じてはかりごとをみらあるをたらさしとす。壁よ耳
ある世のこゝをざ。拙者のあよぞんをたぐいまもある
してまをしいれんと。硯ひきよせなにらかきつけ。両
人の前へさしだせを。桐野利秋一目みるより。おゝら

が撫まーやう。かあらずとづらみて。くぐさんすなと。
幼けれども天然よ。老をいたはる孝行心。さすが勇氣
の隆盛も。うかも涙を押拭ひ。娘の手をひきもづくと。
寐所へ。

第一着よ熊本を。アコレひそうにくゝと。たぐひに耳
喧うなづきあい。篠原胴野たちあがり。萬事我く両人
が。みじゅくあがらうはからうん。なにぶんよろー
うたのみいると。たぐひの禮儀両人の。あとにひろそ
ひ溝口太郎。挨拶そこくいざゝゆく。あとみおくらって
西郷隆盛。コリヤ今うら部屋よて一盞酌ん。よういーや
れとたちあがれど。繁そつくく隆盛の。顔打守手をつ
かへ。まをしー父様。つねにかたろーお顔ぜせ。おろろ
るふをござりませぬう。お酒のかたうにお藥をめ
しあがり。チトおやすみあそばしませ。お脊をさー

五段目　養女志げり之自害　西郷隆盛之出陣　隆盛出陣の場

伴ひ入海の。潮満来おとあらで。鞋踏しめ吉十郎。門口よたちよれだ。忠作それと戸尻よ身をそへ。夜よ入ておたづねあるを。どなさまうとさぐむれだ。ヱヽ拙者を池邊吉十郎と。きいて忠作ふーん顔。まぢくそれよおひうへあれと。りすて奥へつげんとする。おりうちたちでる主隆盛。コリヤ忠作きづひなひ表の客人。これへとをせ。ハット忠作戸を開イザまづあれへとをむれだ。ズット吉十郎隆盛のまへよ両手をつき。遅刻あがらたぶいまたうちやく。かねておほせつけられし別府氏の返書を。けき溝口とうまをす使者をもつて。こなさまでまをしいでさるおもむき。いろ〳〵その儀ハ今朝の書翰よつてしやうちいたした。ごくらうあがらいま一度。要用をたつしてくだされ。そのようむきを。これかうと膝をそろへて耳よ口。ハヽいさいしやうちつるまつると。一礼してたちあがり。袴の股立取手もやく。表のかたへいでゆく。あとうちみやり隆盛を。硯ひきよせさら〳〵と。書認てコリヤ忠作。今うちをいぎあがらん。この一封を定子が実家岩

田氏へおさんいつとせ。ハ、かしこまりまし―てをござりますが。今晩は九時ちぎあれた。翌日までおのむしなされてくださりませ。コハこころへぬいてぶんかな。これまで予がいつけしこと。そもむさくるることなるるりしよ。今日よかぎろうてのぞせとそ。なてゆゑおるぞ。きようあれでのべがし。夜のふけぬうちはやくゆきやれ。ハイなてをうぢくさへいでいゆく。道ひと。叱ちらされ忠作を文箱たづさへいでいゆく。道ひつちぐへ深見有恒。駐来て両手をつき。御註進と呼れで。ホウ註進のおもむきつづさよかしこれ。サレばかねて

貴殿の御説諭も。つひよもちひぬ。血氣の若者。再三らんぼうよおよびしもござい。今日午前十時十分。官軍おそ二万余騎。貴殿をもとめ篠原桐野。村田池上。逸見別府の面くを。賊徒へ征伐の。討手おしよせさふらうゆゑ。いそぎ御出馬さふらうべしと。いうをそひきかくす。きくより隆盛憤怒をあらわし。ハア天なるうえ命なるうえ。國家のためよ肺肝を砕某賊徒などを心得がてし。とても汚名をあがすよおあてた。粉骨砕身のぞみをとげんと。いうれる眼血ばしりて。髪もさかだちばしり

なり。定子を夫（おっと）ようちむりひ。これをしがてんのゆ
りぬ今のありさま。あにごとでござります。スリヤやら
なり今度官軍へ。双（さひそ）をむけるごあよぞんう。ヱヽきこ
えませぬくものっとも賊（ぞく）といわれてた。お腹（まう）のたつも
お道理（だうり）なれど。ソまこのきえまよ御出馬（ごしゅつば）あらだ。これま
でつくせしごたんせいも。水（みづ）の泡となるのみう。御先
祖（ご）の御位牌（おかくはい）よたいし。ここよ御舎弟（ごしゃてい）の手前（てまへ）。一党（ひとまと）こう
をおちのびて。御政心（ごせいしん）くぐさられと。操（みさを）のまことをあら
ましてこゝろもえあげぬ恐法（おそれなき）。隆盛（たかもり）をあざろひ。ハヽヽ
國家（こくか）よつくす我ちよぞん。むやくの諫言（かんげん）つしみお

らふぞ。當時（たうじ）王政（わうせい）とあらたまるも。多年（たねん）これらがこゝろ
を焦（こが）し。やうやく維新（いしん）開化（くわいくわ）の今日。万民（ばんみん）あんどまある
べきところ。年をかさねぬ日をおって。ちぜんおとろよ
御國（ごくに）のありさま。みるよちのびず甚（はなはだ）が。ふたゝび政治（せいぢ）
をあらためて。御國の威光（ゐくわう）を輝（かゞや）さんと。時（とき）をうかゞひ
月日をへるうち。不平（ふへい）をならす青年輩（せいねんはい）。一徹短慮（いつてつたんりよ）のぼ
うぢうなし。彼（かれ）らがためよ某（それがし）まで。賊（ぞく）の汚名（をめい）をうくる
といへども。もとよりなんぞ一天（いつてん）の君（きみ）を。怨（うらみ）をそまう
らんや。我身（わがみ）のなりゆきをいうがなるともぜひなけ
れど。なにさべつなき妻（つま）や子（こ）よ。うきめをおせその

うへよ。かなーひさいごをさせるふびんさ。そこよ養
女のあの繁。賊の娘とあなどられ。よきえんぐみもえ
あるまじ。あうるよ繁の父親を。せいがうよむうもれ
者よて。そでよこんども我々を。しのことしやうちせり。ゆ
ひうれなど。自然剣も鈍る道理。げんぜのえんがその
人のよみとあうて後世の。名誉よさもることもあ
らんと。おゆひまをせむまをにねど。娘繁のえんきう
て。おうの父御へそそーなど。この隆盛よ恩義もあく。
おうぶん今度手柄をそげん。この道理をがてんし

て娘繁をひきつれおうち。ひとまづそなさを実家よひ
そみ。時節をはうつて娘をよこしまうたをふし。我案否を相待れよ。先刻そなさの実家へ
むけー一封た。そなさをあづける頼状ぞて。エ、オヽサかくけうせーうへてうつなうごくぬ我性根と。胸をもるうる夫のことば。縋る手術もないぢやくう。稍あつて顔をあげ。私ハおおらく古里へ。かくうてみよとのおほせあれむ。ぜひもあきらめいあれど。可愛さうよあの繁。さそやなげうむかなーやと。前後ふかくよ泣沈む。始終のやうをきく繁。そそへかねーうそあ

げて。ワットばかりよ泣いぶせぜ。定子ハひきよせ抱しめ。顔つくくと打守。コレく繁今父様のおつゝやること。其方ハきいてゐやつさうな私よおつの父親があるとのこと。その父親へ義理をたて。いまさら私のそんきつて。賊の娘といそせゞと。おなよけぶくおつゝやるあれど。そこゝや賊の子といそれても。やつぱり父様の子よなりさうざんす。コレまをゝ母さまへ。父さまへ御咄をと。あとをそいそずちやくり泣。ヤアなにをぐづく咄言だて。ふびんなぐらコリヤ繁。そんきつよそ親子でないと。きいてか

なゝき涙ごえ。スリヤどのやうよお咄まをゝしても。おきいれをごどうませぬう。ハアそうとばかりよなげきゝぐ。かねてよういの懐剣を。抜ようはやく我咽喉へ。グットつらぬくありさまを。それとみるより定子をおどろき。ヤレなにゆえのおがいぞと。そゞろ涙よくれおさる。娘をくるゝき顔をあげ。まをゝ母さまよ。なんゆえのおがいとをおなきけあい。親子のえんを一世とやら。いま父さまよそんをきられ。なたをのゝみよ存生まゝやう。それで私もおがいゝて死ます。もこゝをふびんとおぼゝめし。今端のきえまをゝ父様。

たつさ一言我子でと。おことばかけてくださりませ。
それを冥途へみやげとおしえろこゝろのはつあさを。三途の川や死出の山。こ
ゑ。この年月の御養育。そのごおんもえおくらず。さろ
さまおこゝろのおがい。にくい奴とお叱もあろけれど。ホム
や父さゑよえんきられさがかをーさみ。おがいーて
死まする。母さゑおまへを存生て。ぞいぶんうづらえ
ぬやうよーて父さゑを大切よ。ァヽもゝ目がみえぬ。
父さゑ母さゑ。お名残おーやとのびおりり。くろーき
體をもいまもり。はろなくいきをたえはてゝろ。ハァ

かなーやと抱ーめ。定子を身も世もあられぬおもひ。
いろよ勇士の道ぢやとて。二つの年よりそぐてー娘。
現在目のまへ見殺しよ。もるがみちでもござんすま
い。せめて回向とおぼーめしのこほりの親子ぞ
と。たつさ一言おこゝばを。かけてやいのと口説さて。
あいよひろゝ怨泣。おりひやろるゝばりり。お
うから息せき表口。たちかくる下郎の忠作。それとみ
るようどろうとざし。お且那様。チヱヽおうらめーうご
ざりますりい。なにとぞあらてお嬢さゑの。ごうえん
をなされますぞ。かういみとろろさならたゝへ

なになどおもうをうけよとも。この爺いてこのやうあ。おつうひまそまいりますまいりますと。ワツトひれふすま忠義の涙。定子をやうく顔をあげ。ヲヽ、忠作おそうさ〳〵ノウ繁いヲえんをかなしんで。自害して死やらさいのみと。きいて悔りこそなたゆゑ。こといふことあまりのことよなきもせず。そろ〳〵もるこそ道理あり。忠作を老の一徹娘の死骸を抱あげ。ヨヽお嬢さま〳〵なさけないこと。なされまし〳〵なあ。今一足はやくばおあ。むざ〳〵御自害をさせますまいもの。ヨかなしいことをなされまし

な。いまさら愚痴なくとあがら。お二人様もおきゝなされてくださりませ。おもひまをせば七年前。御門前よ赤児の泣ごゑ。をちよりみれむうつくしい女の子。すぐよ奥さまへおしらせまをし。拾あげしをこの嬢さまぬ。なんのいんえんう。この爺いよおなづきなされ。爺いがむさい懐を。親御さまの懐のやうよおぼしめし。爺いが在所の山家唄うたへバ眠るものよして。あけおねふりあそばして。あけくれ爺よ〳〵と。つきふさをうよかおいさいと〳〵御成長よろさがつて。氏よりそだちうお怜悧もの。このあいざもコリヤ爺よ。

そちやちうぶろ大(おほ)ゝ弱(よわ)さなあ。年老(としよ)ハ寒(さむ)もの。寐冷(ねびえ)せぬやうきをつけよと。お着(き)おろしのおゝさぎをくさ〳〵まし〳〵さゆゑ。おゝろのやさしさかさしだけおく。コレ御覧(ごらん)じやつてくださりませ。肩縫(かたぬひ)あげのおゝぎを。そのまゝつねゝ胴衣(どうぎ)とあし。あみくれおつひまでまゐつても。お二人(ふたり)さまハまをすまいまをすまいとおけがのあいやうゝ。麻利支天(まりしてん)様へりうぐゝんこめ。いまのいまゝでこのやうお。ことゝもぞんじませあんず。モウシ〳〵お嬢(じやう)さまお。いま一度(いちど)爺(じい)やとおろしやつてくださりませ。まをし〳〵とあでまをし。我(われ)をゝ

それて泣沈(なきしづむ)。さすが剛氣(ごうき)の隆盛も。忠と孝との二人の律義(りちぎ)おもひやるをど肝(きも)ゝ。鏡(かゞみ)をあざむく両眼(りやうがん)ゝ。たゞもたりねてハラ〳〵。おちる涙(なみだ)を水晶(すいしやう)の。玉(たま)をちらすがごと〳〵なり。忠作涙(なみだ)の目をすりあらめ。ア〳〵泣(な)さとてゞめいさとて。ぞんぶんゝごおがいをあされさもの。あんとおこさ〳〵がござりましやう。イヤまをし奥(おく)さま。おまへさまのおゝびハまざかないませぬうへ。ア、コレ忠作かねてそなさもまをりやるとうり。一旦(いつたん)おほせあるゝきた。そりあーがさき夫(おつと)の氣質(きしつ)私(わたし)や在所(ざいしよ)へかくりましよ。イヤくまをし奥様(おくさま)。ソリヤおまへさまの

いごれうけん。おまくきなの御在所え。このごろ合戦のまつさいちう。あぶないことく。かならずおかくりあそだすな。この爺が在所ハ。これより七里山奥よて。猪猿のすみうあれど。鉄砲玉のとんでくるきづかひもあく。討手のくるやうもあし。爺が手づらこらへさ。粟飯稗飯。おいやでハござりまーやうが。命よりかへられませぬ。この爺の背中をお駕籠とおぼしめし。をふをれていらつーやいまし。かならずおとまをしますと。生質の律義もの。たのもしくそみえよけれおりうきこゆる人馬の物音。隆盛取耳をそばだて。ハテつぶうーやとてたちあがり。眺入そるおりそこそあれ。駈来る逸見十郎太。馬よりおりて一礼し隆盛ようちむくひ。今朝より貴殿の御出馬おひまつとろう。ととや夜も深更ニおよべども。御出馬なきをいうづのおぼつかい。かうみうけますれば。出陣のごういもなく。エ、きこえさ。大将ニハ御妻子の恩愛ニひろれ。盟約をへんぜーよなと。きくより隆盛はらさとねめつけ。ヤアぶれいなる今の過言我かくごをみせんずと。おづくたつて上座ニすゝみ。木綿の上着脱すつれむ。おさまむうーニかくりざき。邊幅軍服を。着して

ろう　そるその行粧。傍まばゆきありさまを。みあぐる
逸見　たくましくばなく。おそれうまやふばうりなり。かく
とおなじく篠原閣幹。垣押破あらそれいで。忍装束脱
すつれむ。あらう糟軍備のようそほひ。おづくとあり西
郷よむらひ。かくおらんとむぞんせーが。かりそめな
らぬ今度の大事。貴殿の御出陣ちゃんをあやしみ。先
刻よりろくの失礼。つゝしんでーやす。いざこのう
へもた時もはやく。御出陣くださるべーと。そゝめよ
をうど隆盛を。たちあがりーがたちどまり。ハヽアけう
せーうんもぜひなけれど。こゝ一旦のいろうより。宸

襟をなやめたてまつり。且万民よかんなんを。ヤヽアな
んと。イヤサハヽヽいそいできよく出発いくさんと。おほせ
み逸見士卒よむらひ。ヤヽアく者共。大将の御前へ乗替牽
と。よそはるまぞ。ハットろゝて御乗馬。數輩ちかくひ
きよそれぞ。莞尓とろらひ西郷隆盛。駒よひらりとう
ちまさがる。定子も今さろう涙ぐみコレくまをー隆盛殿。
薩摩がもりの手疵なら。おいとひなくおてがちあそ
ぜー。ほんのうとびさせをぐのうと。口よもいぐどこ
ろよも。今がこの世のアれうと。たちまる定子忠
作ぐ。ひろへる袂はそーなき。おうかうきこゆる時計

の五時。むらふの谷間(たにま)よりうちだす鉄砲(てっぽう)篠原國幹(しのはらくにもと)いさみたち。アレコソ味方(みかた)のくりだすあひづ。イザ御出馬(ごしゅつば)と大将(たいしょう)の。駒(こま)の左右(さゆう)より篠原逸見(しのはらへんみ)。あまたの軍卒(ぐんそつ)前後(ぜんご)をかこみ川尻(かわじり)さしてゆく。

明治二十一年三月
仝　年同月

日印刷
日出版

發行者　東京日本橋區本町三丁目十七番地　原亮三郎

印刷者　東京日本橋區本町三丁目十七番地　關幸吉

大會捌所　大阪北久宝寺町四丁目　金港堂原亮三郎支店

岐阜仙臺　金港堂支店

賣捌所　各府縣下代理大賣捌所

010190508876